

令和5年度 小中連携教育推進校報告書

楠那小学校
楠那中学校

1 学校の課題

※データ等を基にした学校の課題

本校区は一小一中の学区であり、連携や情報交換は常日頃から行ってはいたものの、小中それぞれがどのような意図やねらいをもって取組を行っているのか認識していない状況があった。そのため小中それぞれで取組が完結しており、系統的に児童生徒を育成する体制となっていなかった。

また、小中合同で取り組む活動を「小中それぞれに目標をもって行っている取組に新たな業務が加わった」と捉える教員にとっては、取組が多忙感につながっている。

これらの問題の解決に向けて、教員一人一人が目的意識をもったうえで、系統性のある小中連携教育を推進するため、以下の研究主題を設定した。

2 研究主題

○小中9年間の学びの系統性を踏まえた教育の推進。

(1) 目的を明確にした、小中連携の取組への改善。

(2) 9年間の学びの系統性を踏まえた授業づくりの推進。

3 取組内容

※1の課題解決に向けて、重点的に取り組む項目とその具体

(1) 目的を明確化した取組

○学校経営計画の統一

・目指す子どもの姿の共有

授業交流：中学校から小学校へ年10回。小学校から中学校へ年5回。

小中合同研修会：小中9年間を見通した平和学習、ICTの活用などの学習内容の確認

・9学年の縦割りグループによるレクリエーション活動「楠那縦グルプロジェクト」

・小中合同あいさつ運動（6月、12月）

・碑前祭 小中合同で光明寺に折り鶴献納・清掃（中学校）

(2) 系統性を踏まえた授業づくり

○中学校教員が小学校において専科（理科）授業、実践研究

・公開授業研究会 小学5年生題材：「もののとけ方」

・中学校の学習内容を意識させる指導

・探究の過程（仮説→実験→考察→まとめ）を意識した授業づくり

・中学校の学習習慣を意識させる指導（期限を決めて課題を提出させる等）

・タブレット端末を活用した授業づくり



タブレット端末を活用した授業作り



光明寺に折り鶴献納



小中合同あいさつ運動

4 検証結果

※成果指標の検証方法および結果

(1) 目的を明確化した取組

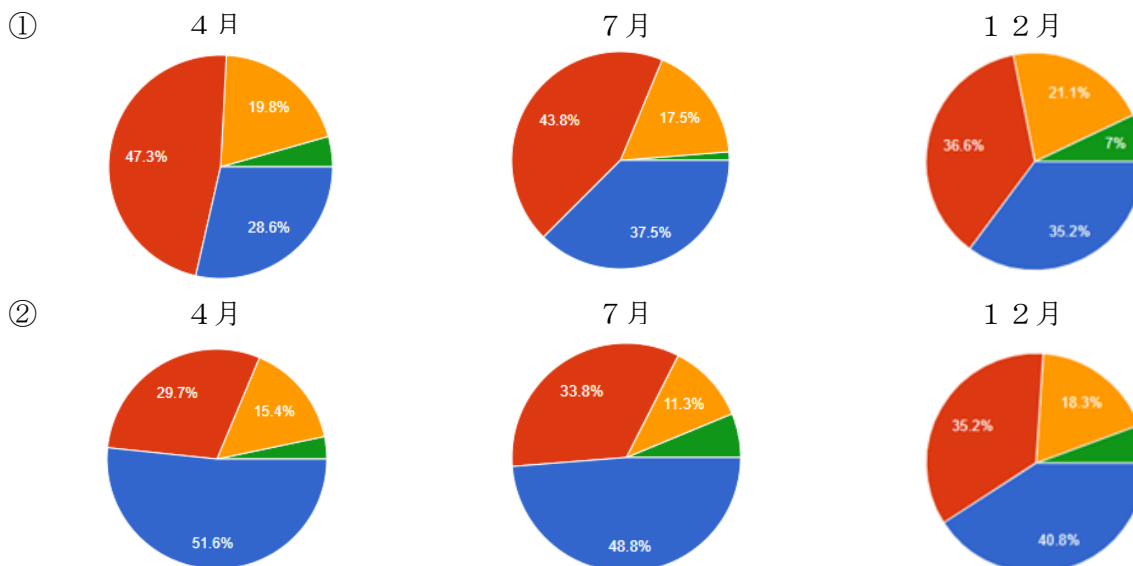
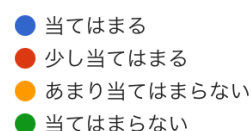
【小中合同研修会における意見から】 ※ 参考別紙

- ・ 平和学習において、小中どちらでも平和公園でのフィールドワークを実施していたが、それぞれ別の目的（小：原爆の実相を知る、中：調べ学習を踏まえ、現地で発見したことや実感したことを発信する）をもって取り組んでいることが確認できた。
- ・ 小中それぞれの目的を踏まえることで、児童生徒への指導において何を焦点に活動するのかを検討することができると思った。
- ・ 生徒に付けたい力を協議することで「継承」「自分事」等、小中で共通して大切にしたいキーワードがあると分かった。(以上 平和学習)
- ・ タイピング技能の実態等を共有でき、どこまで指導するのか、どこから取り組めばよいのかがイメージできた。
- ・ タイピングだけでなく情報活用能力などについても目標を定め、実態や変容を把握すれば系統的な指導が可能だと思う。(以上 ICT 活用)

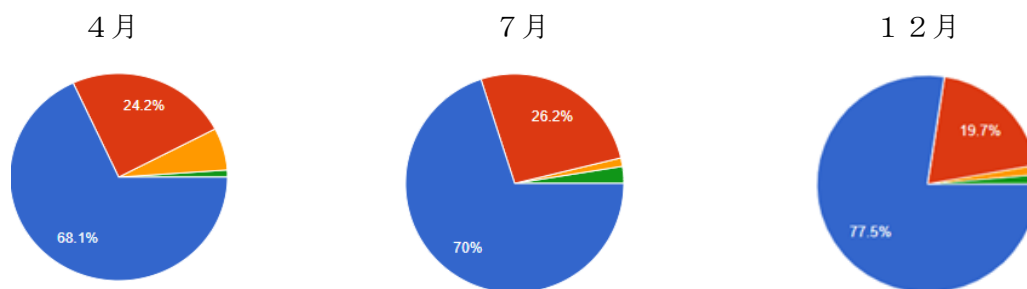
○ 小中合同研修会の実施をとおして取組の実態やねらいを共有することができ、指導の見通しをもつことができた。一方、教育活動全体の共有には至っていないため、今後、どのような取組に重点を置いて取り組むのかを両校で検討し、系統的な指導の充実を図ることが必要である。

(2) 児童にアンケートを実施（4月と7月と12月）※アンケート内容抜粋。

- ① 勉強した内容が、日常生活に生かされていますか。
- ② 理科の勉強が自分の将来に必要ですか。
- ③ ICT を活用した授業はわかりやすいですか。



③



④ 理科の授業で頑張りたいこと、学びたいこと（4月）※アンケート内容抜粋。

- ・ 自分で予想を立てて理由を考えたい。
- ・ 日常生活に活かせるように授業に取り組んでいきたいです。
- ・ 1回先生のお手本を見て、それから自分で実験をしていきたい。5年生の頃はできていなかった。
- ・ 自分で実験したい。

⑤ 理科の授業で頑張ったこと、学んだこと（12月）※アンケート内容抜粋。

- ・ もっと実験をやってみたいと思った。そして ICT を使った授業はとてもわかりやすくテスト前などにカフト（自作の問題を解く）をすることで、テストで満点が取れるようになった。
- ・ 実験結果・考察を自分でまとめられるようになりたい。
- ・ いろんなものに興味を持つようになったから実験をしてみたい。
- ・ 日常生活につながる実験をしたい。

○アンケート結果に対する考察

- ・ ICT を活用した授業をわかりやすいと回答した児童の数が増加した。中学校の授業と同様にオクリンクやムーブノートなどを日常的に使用したことに加え、カフト等、児童の主体性を引き出すアプリケーションの活用が効果的であったと思われる。
- ・ 指導した内容が日常生活に結び付くことを実感させるよう教材研究、実践に取り組んだが、単元によっては児童の経験と合致させることが難しい題材もあり、大きな変容が認められなかった。
- ・ 中学校での学習方法・規律など先を見通した指導をする中で、「予想」「考察」等、探究の課程に着目する児童が少しずつ見られるようになった。しかしながら、その数はまだ少ない。実験を実施することだけを目的とするのではなく、その過程を適切に評価し意識づける必要がある。

5 研究成果

※成果・課題等

【成果】

- ・ 小中それぞれで取組を完結させるのではなく、学校経営計画において前期（小1～小4）・中期（小5～中1）・後期（中2、3）に分け、目指す姿を明示することで9年間を見通してのゴール設定ができた。（学校経営計画参照）
- ・ 校内研修会で小中それぞれの取組のねらいを確認することで、児童生徒を指導する際の視点を得られた。また、新しく小中での取組を行うのではなく、児童生徒の発達段階に応じた系統的な指導ができるよう教育課程を整理することを目的とすることで、教員の負担感が緩和された。
- ・ 中学教員が小学校で授業をしたことで、これまで以上に日常生活と教科を結びつける教材を準備することができた。
- ・ 中学校で扱う内容に繋がるように伝えたり、また探究の課程を意識して授業作りをしたりする等、児童が中学校で学ぶイメージがしやすいように指導することができた。
- ・ 小中の教員間の連携を密にすることで、小中それぞれの目的・思いを伝えながら取組・活動することができた。

【課題】

- ・ ゴール像は設定されたものの、イメージはまちまちであるため、目指す子ども像の具体を共有する必要がある。
- ・ 系統性を意識して授業作りを行ったが、探究の過程の定着には至らなかった。仮説と予想を立てるときに児童の実体験や予備知識と結び付ける必要がある。
- ・ 系統性が確認できた取組について、具体的な連携の方法を検討する必要がある。
- ・ 小学校教員の負担軽減にはなるが、中学校教員の小学校での授業には、教材研究、小学校での学習の進め方の理解など担当教員の負担が生じるほか、時程の違いや行事による時間割の変更など、調整の難しさがあった。担当教員だけでなく、教員全体が協力・理解して、教員全体が関わる仕組みづくりが必要である。